



## 佳作

書評 山本七平著『空気の研究』（文藝春秋 1983）

（和泉特設コーナー：文春文庫 や-9-3）

商学部 2年 井出 薫

私たちは、その場に醸成された「空気」に支配される。例えば、「全般の空気よりして、当時も今日も（大和の）出撃は当然と思う」（軍令部次長・小沢治三郎中将）とあるように、専門家によって「無謀」であると判断されていた1945年の戦艦大和の出撃は、まさに当時の「空気」が押し進めたものであった。このように、日本では、客観情勢の論理的検討のもとに判断が下されずに、「空気」に順応して決断されることがよくある。

昭和初期以前の指導者には、「空気」に支配されることを「恥」とする一面があったが、近代化進行期から、「空気支配」は猛威を振り始めた。それは、痛ましい歴史的事件を引き起こし、私たちが破滅の淵へと追い込んだこともあった。しかし、それにもかかわらず、日本人が「空気」によって支配されてしまう原因を探求し、解明しようと試みる者は今まで誰もいなかったと著者はいう。

著者によると、日本で多く見られるこの「空気支配」は、物体の背後に何かがあるかのように考える「臨在感的把握」をもとに起こる。この臨在感的把握によって、物体を「物神」として人格化し、それに感情移入し、絶対化する。そしてその結果、「空気」が醸成されるのである。例えば、「遺影」は紙と感光液だけの物質であるが、私たちは、そこに死者の魂や精神が臨在していると考え、決して、ただの物質として扱わない。これは「空気支配」の最も単純な例である。この「空気支配」のプロセスは、戦艦大和の出撃の決定にも影響を及ぼした。また最近では、東日本大震災に伴うイベントやテレビCM等の「自粛ムード」に、「空気支配」を見ることができた。私たちの多くが、被災者の心情に感情移入し、これを絶対化した。イベントを行おうとした人は、まわりから「空気を読め」という圧力をかけられたか、あるいは、自らそのように感じて自分の行動を規制したに違いない。

日常の小さな判断から国家的な判断におけるまで、臨在感的把握は、ときに大きな影響を及ぼす。そこで、著者は、臨在感的把握の問題を克服する方法の1つとして、「対立概念を用い、対象を相対的に把握する」ことを挙げる。さらに、著者は、「水を差す」ことが昔から「空気」を消滅させる方法であったと述べる。「水」とは「現実」のことである。そして、問題の解決策は、私たちの日常性（日本人の社会規範や経験則に基づく一般的な理解）、つまり「水」を把握することにあると著者は指摘する。著者が、この「水」を切り口にして、日本の伝統的な社会秩序や日本人の物事の考え方にも踏み込んでいく過程で、私たちは、私たちが幾度も拘束してきたこの「空気」の醸成プロセスの根が非常に深いものであることを改めて理解するであろう。